天智天皇（てんじてんのう）ゆかりの日本最古の黒川油田と明治のシンクルトン手掘井戸

国史跡「臭水油坪（くそうずあぶらつぼ）」、新潟県天然記念物「黒川の臭水」

シンクルトン記念館・石油公園（新潟県胎内市）

★見学ポイント

①天然ガスが音をたてて沸く場所

大昔、胎内市が海だった頃、海の生物の死骸や、陸から運ばれた植物などが泥といっしょに積み重なり、長い年月に石油・天然ガスになりました。シンクルトン記念館の目の前で沸いている天然ガスは無色透明・無臭です（家庭で使用するものには漏れた際にわかるよう臭いをつけています）。
天然ガス国内生産料は新潟が全国トップです。

ガスがポコポコ沸いています。

②原油が今も沸く池（国史跡・県天然記念物）

地表近くの含油層から自然に湧き出た原油が溜まり、真っ黒な池になっています。この原油を「臭水」（くそうず）と昔から呼んでいます。ほかの地域の原油は茶味をおびていますが、ここの原油は風化して真っ黒です。

真っ黒な原油が沸く池

〈豆知識〉

◆日本書紀に登場

日本書紀（６６８年）に、この地から「天智天皇」に原油を献上した記録「越の国から燃える水（原油）を献上する」があります。

◆燃水祭（ねんすいさい）

毎年７月に「燃水祭」を行い、天智天皇が祭られる近江神宮（滋賀県）に採油した油を献上しています。

燃水祭（ねんすいさい）と採油道具「カグマ」

◆独特の採油道具

この地方でしかみられない「かぐま」というシダを束ねた独特の道具で採油をします。水面に浮いた油をこの「かぐま」でくまなく採油します。

③シンクルトン井戸（明治の手掘井戸）

明治６年にイギリス人医師シンクルトンがこの地を訪れ、木枠をはめた安全な井戸の造り方を教えてくれました。深さは１０mほどあり、当時の木枠がくさらずに残っています。この周辺には５０以上の油井戸があり、中には２０m以上の深いものもあります。

シンクルトンの指導で掘った井戸

〈豆知識〉

◆シンクルトンがなぜきたの？

明治時代になると黒川村でも原油の採掘が本格的に始まり、近代的で安全な油井戸の掘方を教えてくれる人を探していました。そんなとき、村松浜の豪商平野安之丞が、長崎にいたシンクルトンをつれてきました。

◆この原油は何に使ったのか？　今もでるの？　今は使わないの？

大昔は珍品として天皇への献上品に、江戸時代になると薬として使われた記録もあります。やがて

●家や神社の柱などの防腐材　●お風呂をわかす燃料　●電気のかわりの灯明　●水田の防虫用タイマツ

●戦争中の戦車などの燃料　　●港の漁船の燃料　　●灯台の燃料

●小学校の給食をつくる際の燃料（昭和30年代）などに使用されました。今も原油が出ていますが、量が少なく、精製する手間などから採油する人はいません。祭時や、稀に神社などの塗装に使用されるだけです。

④シンクルトン記念館・石油公園

黒川油田を発展させるきっかけになったシンクルトンを記念して建てられた記念館には、古くから伝わる採油道具、機械掘りの模型展示や、ハイビジョンシアターなどがあり、黒川油田の歴史を知ることができます。またアラブ首長国連邦の子どもたちから送られた絵なども展示されています。石油公園内には油井戸が残り、ゆっくり散策することができます。

シンクルトン記念館
（石油関係資料の展示）

原油（くそううず）のあかりを使ってワラ仕事

黒川油田の最盛期
（昭和15年頃）

アラブの子どもたちの絵

ハイビジョンシアター

石油公園内の散策道にみられる油井戸（明治期）